別冊資料４

あいちから見る～国際芸術祭の傾向とアーティストの動向

展示中止の背景とその影響

金井　直

２０１９年９月２５日

芸術祭大国日本？

毎年、各地でたくさんの芸術祭が開かれる。

札幌国際芸術祭（北海道）
Reborn-Art Festival 2019（宮城）
さいたま国際芸術祭（埼玉）
横浜トリエンナーレ（神奈川）
大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ（新潟）
水と土の芸術祭（新潟）
北アルプス国際芸術祭（長野）
奥能登国際芸術祭（石川）
六甲ミーツ・アート（兵庫）
瀬戸内国際芸術祭（岡山・香川）
・・・・

北アルプス国際芸術祭（2017）

現代美術をメインコンテンツとし、外国人アーティストも多数参加。

※ 現代美術Contemporary Art　Contemporary = 同時代的
→同時代を生きる世界中のアーティストの活動を紹介することが重要。

芸術支援、文化交流、地域づくり、観光事業・・・多様な開催理由

あいち
トリエンナーレ
2010
8.21→10.31

あいちトリエンナーレ（2010～）

都市の祝祭

AICHI TRIENNALE 2013
Awakening 揺れる大地
2013.8.10→10.27
われわれは どこに立っているのか
場所、記憶、そして復活
あいち
トリエンナーレ
2013

① 芸術監督制
テーマ性重視の企画展開

虹の
キャラヴァンサライ
あいち
トリエンナーレ
2016

愛知芸術文化センター
2010、2013、2016、2019年

長者町会場
2010，2,013、2016年

岡崎　2013、2016年

豊橋　2016年

② オール愛知の発想　地域展開を重視

芸術祭の起源

ヴェネツィア・ビエンナーレ、イタリア　1895-

1895年にはじまった国際美術展の老舗。
ディレクターによる企画展と国別展示。表彰制度有り。

第二次世界大戦後の芸術祭

ドクメンタ、 カッセル、ドイツ 1955-

1955年、前衛芸術の復権の場として出発。おおよそ5年に一度の開催。
ディレクターが打ち出すテーマを重視する企画展。

芸術祭、東アジアへ

光州ビエンナーレ、韓国　1995–

ペドロ・レイエス展示風景　2012

1980年の光州民主化運動の精神を受け継ぎ、
新しい文化的価値を世界に発信する場として設立。

東アジアに広がる芸術祭

光州ビエンナーレ 1995-

上海ビエンナーレ 1996-

台北ビエンナーレ 1998-

越後妻有アートトリエンナーレ 2000-

横浜トリエンナーレ 2001-

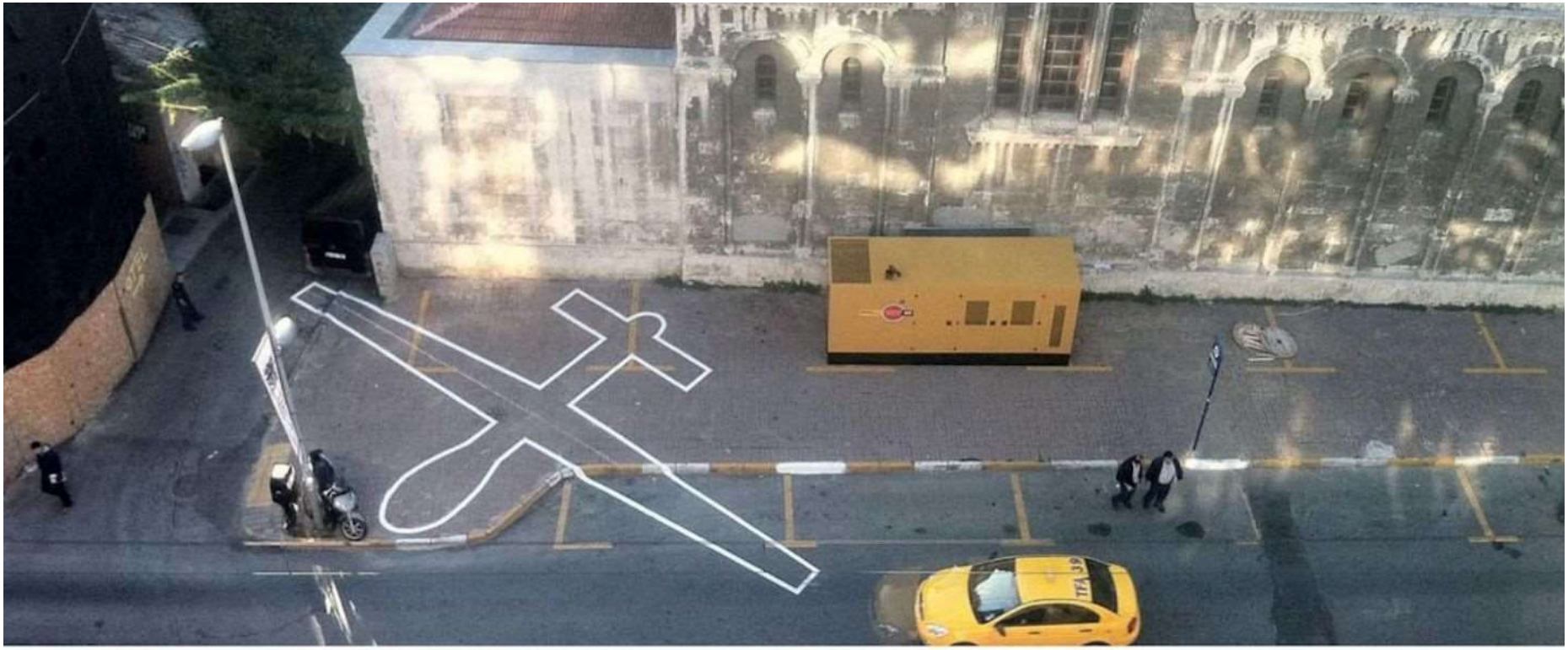
釜山ビエンナーレ 2002-

広州トリエンナーレ 2002-

瀬戸内国際芸術祭 2010-

あいちトリエンナーレ2010-

あいち2019。 新たなテーマで、新しい会場を加え、スタート

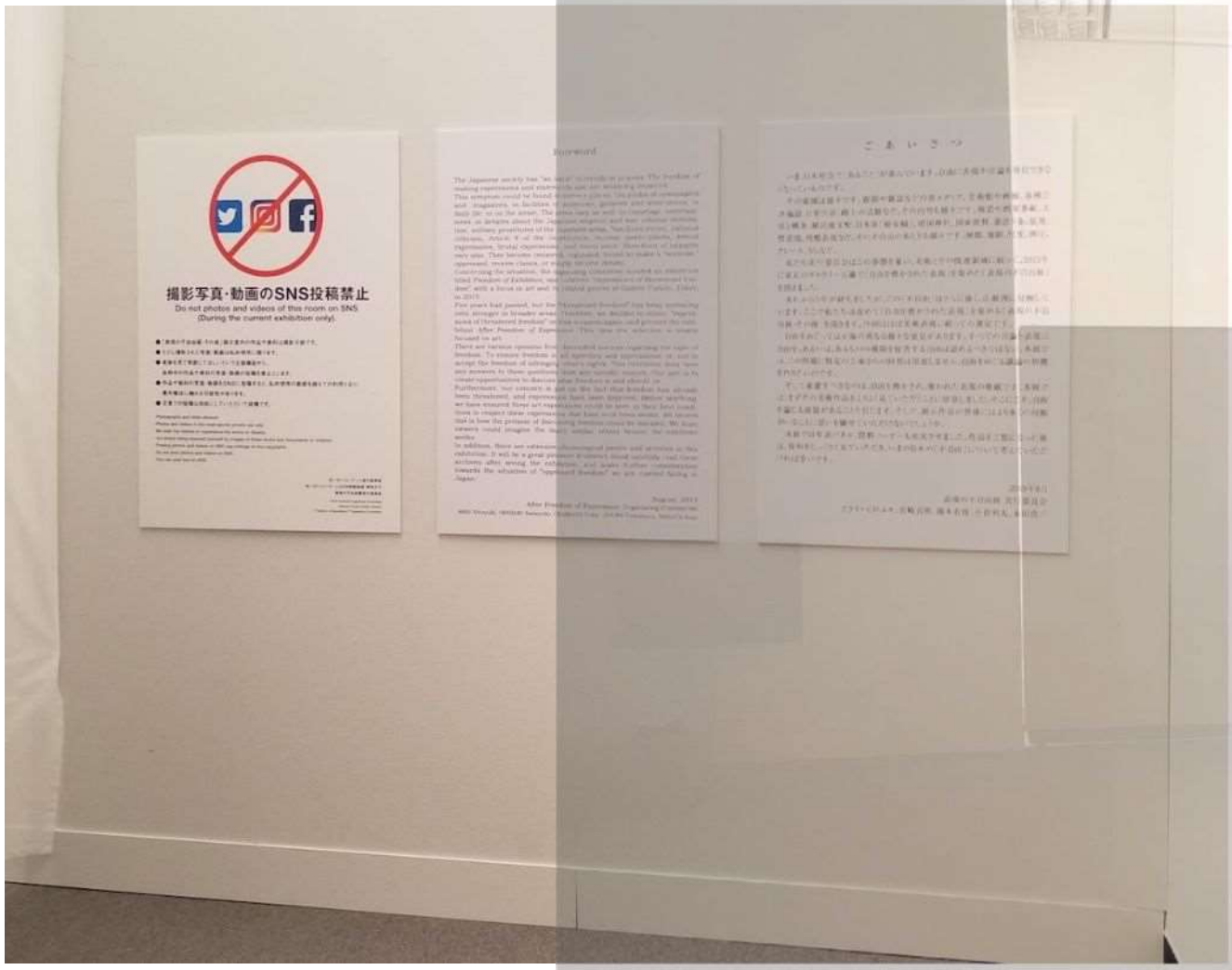


あいちトリエンナーレ2019 情の時代

AICHI TRIENNALE 2019: Taming Y/Our Passion

あいちトリエンナーレは、2010年から3年ごとに開催されている国内最大規模の国際芸術祭です。4回目となる2019年は、国内外から90組以上のアーティストを迎えます。国際現代美術展のほか、映像プログラム、パフォーミングアーツ、音楽プログラムなど、様々な表現を横断する、最先端の芸術作品を紹介します。

2019年8月1日[木]−10月14日[月・祝]



「表現の不自由展・その後」展示中止

「情の時代」～政治・社会的テーマを重視するキュレーション

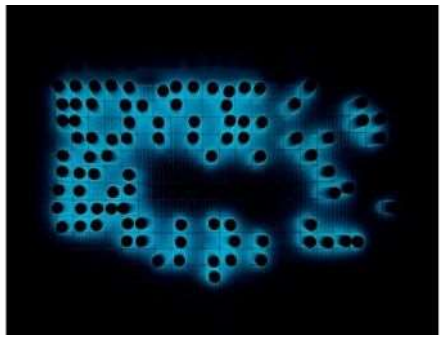
ユェン・グァンミン
《日常演習》2018

ジェームズ・ブライドル
《ドローンの影》2019

グゥ・ユルー
《葛宇路》2017

ヘザー・デューイ＝ハグボーグ
《Stranger Visions》2012-2013

アンナ・ヴィット
《未来を開封する》2019



タリン・サイモン
「隠されているものと見慣れぬものによるアメリカの目録」2007年

世界の芸術祭の近年のテーマ
芸術の社会問題・政治的緊張を直視

ヴェネツィア・ビエンナーレ

世界を構築する（2009）
ILLUMInations(2011)
百科事典的宮殿(2013)
全世界の未来(2015)
芸術万歳(2017)
数奇な時代を生きられますように(2019)

『資本論』を読む　2015

～多様な世界観の紹介や、多文化主義的なアプローチへ

ドクメンタ

11(2002)
5つのプラットホーム
プラットホーム1　実現されていない民主主義
プラットホーム2　真実のもとの実験
プラットホーム3　クレオール性とクレオール化
プラットホーム4　包囲網の下で：アフリカの四都市
プラットホーム5　展覧会

12(2007)
近代性は我々の過去か？
むき出しの生とは何か？
何がなされるべきか？

2012年の会場前
反グローバリストが集結

13(2012)
「ステージ上」「包囲下にある」「希望をもった状況」「撤退、退却する」

14(2017)
アテネに学ぶ

光州ビエンナーレ

年次報告（2007）
万人譜（2010）
ラウンドテーブル (2012)
敷地を燃やせ (2014)
第8気候帯—芸術は何をするのか (2016)
想像の境界(2018)

～記録・アーカイヴへの関心、キュレーションの多極化、コレクティヴ志向

「展覧会はますます知的・文化的・社会的・政治的な調査と表現の手段となる」
（Jens Hoffmann, *Show Time : The 50 Most Influential Exhibitions of Contemporary Art*, New York, 2014.）

作家の行動：作品の展示中止・改変

光州ビエンナーレ20周年特別展（2014）

ホン・ソンダムの《セウォル五月》はパク・クネ大統領（当時）を風刺。
光州広域市側が修正を求めたが、作家が拒否したために、展示自体が取りやめとなった。これに抗議してチョン・ヨンチャン、イ・ユンヨブ、ホン・ソンミンらが自作を撤去。

あいちで起こっていること

「表現の不自由展・その後」の出品作家に対する連帯と、展示中止に対する抗議としての《展示の一時中止》

○ 愛知芸術文化センター
タニア・ブルゲラ……展示室を閉鎖しステートメントを掲出
ピア・カミル……音楽を停止し、幕が一部捲り上げられ、ステートメントを掲出
レジーナ・ホセ・ガリンド……映像作品の上映が中止、撮影時に使用した小道具が散りばめられる
クラウディア・マルティネス・ガライ……照明が落とされ、映像作品の上映が中止、ステートメントを掲出
ドラ・ガルシア……ポスターの上にステートメントを掲出
イム・ミヌク……展示室を閉鎖しステートメントを掲出
パク・チャンキョン……展示室を閉鎖しステートメントを掲出
ハビエル・テジェス……展示室を閉鎖しステートメントを掲出
○ 名古屋市美術館
ドラ・ガルシア……ポスターの上にステートメントを掲出
モニカ・メイヤー……《The Clothesline》で来場者から寄せられた回答が取り外され、破られた未記入のカードが床に散りばめられる。ロープにはステートメントが掲出され、《沈黙の Clothesline》に変わる

○豊田市美術館
　レニエール・レイバ・ノボ……絵画を新聞で、彫刻の一部をゴミ袋で覆い、ステートメントを掲出

———

《展示の辞退》
○ 愛知芸術文化センター
　CIR（調査報道センター）……展示室を閉鎖

《展示の再設定》
○愛知芸術文化センター
　田中功起……
１）通常展示の中断。
２）展示室入り口にて、来場者への手紙及び作品の一部であるアーティストノートを配布。
３）パフォーミングアーツ・プログラムとして予定されていたエクステンション企画（アッセンブリー＊）は当初のとおり開催。

会場掲出文

表現の自由を守る

2019年8月12日

私たちは、以下に署名するあいちトリエンナーレ2019の参加作家として、トリエンナーレ内の展示会場を一部閉鎖するという決定 を、決して容認することのできない検閲行為として非難します。「表現の不自由展・その後」と題されたその展示室は、国や行政から の政治的圧力と、問題視されている作品を展示から外さなければテロ行為をするという匿名の脅迫者たちの圧力により、8月3日から 無期限に閉鎖されています。

以前のアーティストステートメントで公に表明したように、私たちは、トリエンナーレのスタッフと検閲された芸術作品に対する暴力 を扇動するような脅迫行為を断固として認めません。展覧会スタッフと観客の心身の安全を確保するため、あらゆる予防措置が取 られなければなりません。しかし、その上で、「表現の不自由展・その後」の展示が再開され、当初予定されていた通りトリエンナーレ 閉会時まで継続されるべきだと主張します。

今回の件において、攻撃の主な標的は、キム・ソギョンとキム・ウンソンによる彫刻作品《平和の少女像》でした。この作品は、日本 において今もなお抑圧されている第二次世界大戦時の軍事的性奴隷制度(婉曲的に「慰安婦」と呼ばれている)の歴史的記憶を 取り戻すことに焦点が当てられています。私たちがアーティストたちの声を聞き、作品が展示されるよう支援することは、倫理的な 義務だと考えます。表現の自由は、どのような文脈からも独立して擁護される必要のある、不可侵の権利です。

ここでいう、表現の自由への攻撃には以下を含みます。
1)河村たかし名古屋市長による「表現の自由展・その後」の展示中止を求める不適切な発言
2)菅義偉官房長官による文化庁からの補助金の見直しを示唆した威嚇ともとれるコメント
3)展覧会スタッフが受けた数多くの匿名嫌がらせ電話
4)「表現の不自由展・その後」を閉鎖しないとテロ行為をすると脅迫するファックス

あいちトリエンナーレ実行委員会が不合理な脅しと政治的な要求に屈したことは表現の自由を侵すものであると考え ています 。また「表現の不自由展・その後」の参加アーティスト、キュレーターたちおよびその実行委員会との事前の議論を経ずにこの展示室 を閉める決断をしたことには疑問を呈します。私たちは、これが検閲でなく「リスク管理」の問題であるという考えには根本的に同意 できません。アムネスティ日本、美術批評家連盟AICA JAPAN、日本ペンクラブ、そして国内外の報道機関が、これを一つの検閲 のかたちとして公的に非難しています。。

文化機関として、展示作家の権利と表現の自由を守ることはあいちトリエンナーレの責務です 。もちろん人命や安全が危険にさらされたとき、決断が容易でないことは理解します。しかし公的機関としては、関係機関と連携し、スタッフ、観客、および展覧会に 関わるすべての人に対し保護および安全を提供することもまた責任のひとつです。警察には、あらゆるテロ脅迫の場合と同様、真剣 かつ正式な捜査を実行する義務があります。すべて、本来なら「表現の不自由展・その後」が閉鎖される前に考慮されるべき措置でした。

お互いに支え合い、励ましてくれた事務局や会場担当のスタッフたちを巻きこむつもりは毛頭ありません。私たちは彼らの熱心な 仕事に感謝し、この困難な局面において彼らを支えたいと思っています。しかしながら、すでに「表現の不自由展・その後」が検閲 されてから1週間以上が経ちました。この間に、運営側はアーティストとの公開議論の場を準備することに受け身のままで、私たち アーティストは展覧会を再開することがいかに重要かを強調してきました。そして、少なくとも二人がテロの脅迫を行ったとして 逮捕されました。しかしながら、検閲された展示室が再開されるかどうかについて、未だ明快な回答をもらっていません。

従って、私たちは検閲されたアーティストたちとの連帯を公に示すための身ぶりとして、「表現の不自由展・その後」が観客に閉ざさ れている限り、トリエンナーレに展示している自らの作品展示を一時的に停止するよう、運営側に要求します。この行為を通じて、 あいちトリエンナーレ実行委員会が、政治的介入や暴力に屈して「表現の自由」を妨げることなく、「表現の不自由展・その後」を 再開し、素晴らしい仕事を続けてくれることを心より願います。

表現の自由は重要なのです。

タニア・ブルゲラ
ハヒ゛エル・テジェスレシ゛ーナ・ホセ・ガリント゛
モニカ・メイヤー
ピア・カミル
クラウテ゛ィア・マルティネス・ガライ
イム・ミヌク
レニエール・レイバ・ノホ゛
パク・チャンキョン
ヘ゜ドロ・レイエス
ドラ・ガルシア
ウーコ゛・ロンディノーネ
田中功起

タニア・ブルゲラ（キューバ）
ハビエル・テジェスレシーナ・ホセ・ガリント（グアテマラ）
モニカ・メイヤー（メキシコ）
ピア・カミル（メキシコ）
クラウディア・マルティネス・ガライ（ペルー）
イム・ミヌク（韓国）
レニエール・レイバ・ノホ（キューバ）
パク・チャンキョン（韓国）
ペドロ・レイエス（メキシコ）
ドラ・ガルシア（スペイン）
ウーゴ・ロンディノーネ（スイス）
田中功起（日本）

芸術活動のグローバル化。
近代的な美・芸術の自律はもはや自明ではない。
政治的緊張の高い地域・環境で活動する芸術家たちも多い。
明確な権利意識、政治感覚、倫理観が、展示中止・改変という手段をも選択させる。

作品の展示中止（要求）・作品改変の事例

第6回グッゲンハイム国際展（1971）
ダニエル・ビュラン作品の撤去に抗議して、参加作家が出品を取り下げ。
「プロジェクト'74」（ヴァルラフ・リヒャルツ美術館、ケルン、1974）
ハンス・ハーケ作品の撤去に抗して、ダニエル・ビュランが自作を改変。

→展示に関しての抗議

アイ・ウェイウェイ「破裂」（ファウルスコウ財団、コペンハーゲン、2016）
難民申請者の金品を接収するデンマークの法律に抗して、同国で開催中の展覧会を閉鎖。
ホイットニー・バイエニアル（ホイットニー美術館、ニューヨーク、2019）
法執行機関の装備品にかかわる理事の辞任を求めて、複数の作家が展示中止を要求。
ナン・ゴールディン展（ナショナル・ポートレイト・ギャラリー、ロンドン）
オピオイド販売の責任が問われるサックラー家からの寄附を美術館が受け取れば、自身の回顧展をボイコットするとナン・ゴールディンが宣言。（2019）

→ 展示をこえる社会的抗議

キュレーターもボイコット

第12回ハバナ・ビエンナーレ（2015）

美術史家・キュレーターのグスターボ・ブンティンクスが、キューバ当局のタニア・ブルゲラの人権侵害に抗して、ビエンナーレ関連企画をボイコット。

⇒ 人権問題や、文化施設の社会的責任を問う展示ボイコットやその宣言が、世界各地で繰り返し起こっている。

作品の展示中止・改変の影響

～明らかに～

作品の発表・享受の機会を奪う。
作品のあり方（同一性）を歪めてしまう。

～短期的に～

本トリエンナーレの運営に大きな支障。
開催準備中の他の芸術祭への影響（作家・キュレーターのコミュニケーションを阻害）。

Cf., 流通する情報

“この（「表現の不自由展・その後」の）出品取り消しは、政治家たちの要請による、芸術家の表現の自由の侵害である”（国際美術館会議CIMAMの声明2019年8月27日より）

あいちトリエンナーレはテロリストによる脅迫、恫喝によって、閉じられた。このトリエンナーレに参加する者として、人々のために経験を分かち合い、声を発する場を開くアーティストとして、私は、作品を検閲されている仲間の側に立つ。（The Art Newspaper Web版　8月21日より モニカ・メイヤーの言葉 ）

作品の展示中止・改変の影響

～中期的に～

国際的な芸術文化状況から孤立する。
展覧会の内向化・唯美化が進む。
美術館自体の国際的信頼低下。交流機会の減退を招く。
芸術家の国際的な活動の支援が困難になる。

→「文化芸術基本法」の理念から乖離

我が国の文化芸術の振興を図るためには，文化芸術の礎たる表現の自由の重要性を深く認識し，文化芸術活動を行う者の自主性を尊重することを旨としつつ，文化芸術を国民の身近なものとし，それを尊重し大切にするよう包括的に施策を推進していくことが不可欠である。（前文より）

文化芸術に関する施策の推進に当たっては，我が国及び世界において文化芸術活動が活発に行われるような環境を醸成することを旨として文化芸術の発展が図られるよう考慮されなければならない。（第２条４）

～根本的に～

国民の知る権利を阻害する。

→安全に作品を展示・鑑賞できる環境の回復が急務